

天然ガスが新しいエネルギー政策を拓く



聞き手
伊藤 元重
総合研究開発機構 (NIRA)
理事長



ゲスト
村木 茂氏
東京ガス株式会社
代表取締役副社長執行役員

- 国内ガスパイプラインのネットワーク化を急げ
- エネルギー産業のボーダーレス化が進み新しいビジネスが生まれる
- 天然ガスは総合エネルギー政策のグローバル化への鍵を握る

伊藤 これまでの日本のエネルギー政策で、まず、ここを変えるべきという改革のツボはどこにあるか。

村木 ガス分野の改革としては、日本国内のガス輸送パイプラインをエネルギーインフラとして公平性、透明性、中立性を担保しつつ、早急に構築すべきである。それによってLNG（液化天然ガス）のより効率的な利用と、備蓄量の問題などを含めたエネルギー・セキュリティの向上が期待できる。

伊藤 ガス輸送パイプラインのネットワーク化の遅れにどのような問題点があるか。

村木 日本のエネルギー選択の再検討を進める中で、原子力は選択肢としては残すべきだが、かなり縮減されるだろう。では、その代替エネルギーは何か。再生可能エネルギーは普及に時間がかかるうえに供給が不安定だ。低炭素化も併せて進めるならば、天然ガスを使わざるを得ない。工業用、業務・商業・家庭用だけではなく、発電用のガス利用も拡大する。そうすると電力市場の改革と合わせてガス輸送パイプラインのネットワーク化が、喫緊の課題となる。

伊藤 天然ガスの利用拡大とわが国のエネルギー政策の改革で見えてくる新しいビジネスチャンスがあるか。

村木 ある。電力市場の改革すなわち自由化が進めば、コージェネ（熱電併給システム）を上手に組み込んで、電気と熱をいかに効率的に使っていくかが鍵になる。

今までのコージェネは、その地域なり工場だけで熱と電気を使うビジネスモデルだったが、これからはコージェネの電気を市場で売り買いできる。大型の発電所を持っていれば、その電気でコージェネの自家発電の不足分を補給することができ、集中型と分散型が最適な組み合わせとなるようなビジネスモデルを作れる。新しい都市開発の様々なニーズに応えることも可能だ。改革によってエネルギー産業のボーダーレス化が進む。自由化を進めることで、デマンドサイドでもビジネスチャンスが広がる。

伊藤 国境を越えた世界ではおそらく資源の取り合いや、さまざまなレベルの問題があると思う。総合エネルギー産業のグローバル化という点から見ると、日本のエネルギー産業はどのようにしていったらよいか。

村木 エネルギー産業は探鉱・採掘などの上流分野を押さえているメジャーが既にグローバル化しているので、日本がここに切り込んでいくのは、そう簡単ではない。むしろエネルギーインフラ分野にどのように進出するかということだと思う。街づくりや工場立地におけるエネルギーシステムにどうやって進出していか。例えば東南アジアなどはもともとインフラが弱いので、工業団地内にコージェネ分散型の自立電源を入れて熱も利用する。このような分野のソリューション提供ならば、日本は結構強い。

とはいうものの、一企業、一産業だけの問題ではなく、国としてエネルギー源をどう確保するかは重要な問題だ。天然ガスの優位性がこれから高まってくる。そのなかで、シェールガス革命は大変なインパクトがある。比較的高価なLNGを買っている我が国としては、こうした新しい環境を取り込みながら、効率的により多くのガス利用ができるような戦略を、今、立てなければならぬ。